The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「謙遜の原則」の適用に関する比較社会語用論的試み
Author(s)	彭, 国躍
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1990, 24, p. 39-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56509
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「謙遜の原則」の適用に関する比較社会語用論的試み

彭　国　躍

1. 研究の目的

リーチ (G. N. Leech) は，対人関係的修辞を記述するに当たって，グライス (H. P. Grice) の「協調の原理」の上に，更に「丁寧さの原理」――人々は大体において失礼な信念よりも礼儀に適った信念を表現しようとするものである――を導入した。そして丁寧さの原理に，その下位原則として (1)気配りの原則，(2)寛大性の原則，(3)是認の原則，(4)謙遜の原則，(5)合意の原則，(6)共感の原則などを設けた。人間の丁寧な言語行為はそれらの諸原則を遵守しながら行われるものだとされる。ところが，それらの一般語用論的な原則が実際適用される場合，それぞれの原則がすべて均等に行われることはなく，それらの間に，時々一つの原則を守るために，他の原則を犠牲にしなければならないなどのような衝突が起こったりして，その適用の度合は決して一様にはならない。語用論諸原則の適用は，同じ言語社会においては，話し手と聞き手の社会的属性や発話の社会的場面などの要素に影響され，多様な変化を呈するが，異なる言語社会の間では，これらの原則がどのような社会的要素に影響され，慣習的にどのようなタイプの適用状況を呈しているかなどにおいて相違が出て来る。語用論的原理や原則の適用と社会的属性の関係を研究し，また異なる言語社会での語用論的原理の適用を比較することはそれらの社会での言語行為の習慣，人

間関係の特徴を解明する一つの手掛かりになると思われる。

本研究は丁寧さの原理の一つである「謙遜の原則」――自己への賞賛を最小限にし，自己への非難を最大限にする――を中心に，丁寧さの語用論的な原則が日本社会と中国社会においてどのように適用されているかを考察することを目的とする。リーチはその著作《語用論》(『PRINCIPLES OF PRAGMATICS』1983) の中で，R. A. MILLER の話を引用して「日本の社会では，そしてもっと特定的には日本人の女性の間では，謙遜の原則の力は，英語圏社会における通常の場合より一層強力である」(p. 199) と述べている。つまり，同じ発話状況において，日本社会では英語圏社会より謙遜的な言語行為が多く行われ，しかも，日本社会の中では，女性は男性より謙遜行為を好む傾向があるということを示唆している。それは経験論的に述べられたもので，話し手と相手との社会的属性や対話の場面や話題の内容など色々な会話の状況を捨象したうえでの言明であるが，ここでは，これらの経験的な主張を検証することを含めて，「謙遜の原則」の適用は，日本社会において，どのような社会的要因と関連し，話し手と聞き手の属性，話題の内容，話し手の心理状態にどう影響されるかを考察し，そして，日本と地理的にも近接し，また文化的にも近いと言われる中国社会での適用状況と比較し，両方の社会での「謙遜の原則」の適用における共通点と相違点を探ってみたい。

2. 調査の概要

今回の調査は，1989年5月から7月にかけて，中国の上海と日本の大阪のそれぞれで行われた。被調査者は機縁法によって上海大学と関西大学を中心に選ばれたもので，すべて20代の若者である。中国側は109人のうち，男性48人，女性61人で，日本側は98人のうち，男性48人，女性50人である。両国の被調査者の中では，上海地区と関西地方の出身者は，それぞれ九割

以上に達している。

調査の具体的な狙いは，日本社会と中国社会の中での，「謙遜の原則」の適用に現れる――(1)話し手の性別による差，(2)相手の社会的属性による差，(3)話題内容の性質による差，(4)話し手の心理的認識による差，(5)「合意の原則」の適用との相関関係などを考察することである。

調査の方法はアンケート式で，質問項目は，主に多肢選択式の質問法によるものである。各項目は，「相手に誉められた場合，どう反応するか」という質問を中心に，相手の人物を，その属性，話し手との関係によって，「先生，上役，父，母，同僚，知り合いの男性，知り合いの女性，初対面の男性，初対面の女性」などの項目に分け；話題内容を，相手との関係に応じて，「成績と業績，人柄と性格，服装と身の回りのもの，容貌とスタイル」などの項目に分けた。被調査者の反応は，言語的行為では (1)感謝する，(2)謙遜する；非言語的行為では (3)直接答えずにほほ笑む，(4)直接答えずに話題をそらす（以下「謝」，「謙」，「笑」，「転」と略す）の四つの選択肢を設け，その中から一つだけを選択してもらうことになっている[1)]。

3. 話し手の性別による分析

まず，話し手の性別による回答の差を分析しよう。日本側の回答結果を，話し手の性別によってグループⅠ（男性），グループⅡ（女性）に分け，両グループの回答項目「謝」，「謙」，「笑」，「転」に現れた延べ回答数を見ると，グループⅠ（男性）の項目別の延べ回答数は「謝」266，「謙」226，「笑」374，「転」125，「他」（その他の回答）14，合わせて1005になっている。グループⅡ（女性）の場合は，「謝」422，「謙」284，「笑」250，「転」75，「他」19，合わせて1050である。中国側では，グループⅢ（男性）の回答結果を見ると，「謝」213，「謙」212，「笑」283，「転」265，「他」1，合計974になり，グループⅣ（女性）の場合は，「謝」313，「謙」

274,「笑」518,「転」183で，合計1288になっている。

各項目の回答数がⅠ～Ⅳの各グループの中で占めるパーセンテージを示すと，図1のようになる。二つの言語行為の相関関係をみるために，図の中央の部分はそれぞれ非言語行為のB「笑」とCの「転」の数値を表し，その両側の部分はそれぞれ言語行為のA「謝」，D「謙」の数値を表す。

謙遜行為だけを見ると，日本の女性（27%）は日本の男性（22%）より，人に褒められたとき，謙遜の反応をすることが5%多い。しかし，これだけでは，ただちに，日本の女性が謙遜行為を特に好むと即断することはできない。他の三つの反応と合わせて見ると分かるように，日本の男性に比べて，日本の女性は感謝行為も多く取ることが認められるからである。

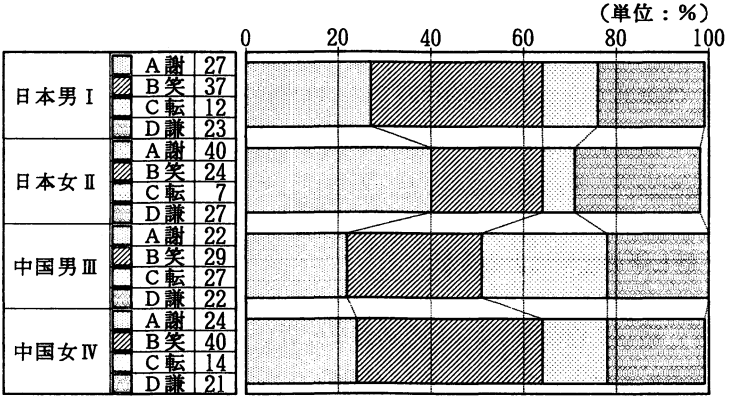


図1

感謝行為は「合意の原則」── 自己と他者との意見の相違を最小限にし，自己と他者との合意を最大限にする ── が丁寧に適用された行為である（リーチ p. 199)。「謝」,「笑」,「転」,「謙」の四つの行為を見ると，「謝」と「謙」は積極的に相手に好意を示すという点では礼儀に適い，丁寧的である。(「謝」と「謙」のどちらがより丁寧だと認識されているかについては第7節で触れる。) 日本の女性が感謝行為も謙遜行為も日本の男性より

多く取るということは，人に褒められた場合，日本の女性は男性より丁寧な言語行為をする傾向があるということである。日本の女性は男性より，敬語の使い方など言葉が丁寧であるという調査報告が多く見られるが（大石1983），このような話し手の性別による差は，言語行為のうえにも現れているわけである。

中国の男性と女性の間には，言語行為の場合，感謝行為においても，謙遜行為においても，殆ど差が見られない。現代中国語には，性別による言葉の位相的な差がはっきりとは見られなくなったと言われているが（藤堂1974），今回の調査結果は，このような傾向が言語行為にも現れたことを裏付けている。表現形式だけでなく，その言語行為の選択にも男女の間にはっきりとした差は認められない。

非言語的行為のC「転」という反応は，一方的に話題を中断させることから，相手に対する好意的な配慮をまったく示していないという点で，Bの「笑」よりも無礼で丁寧さを欠くと見るべきであろう。非言語的行為だけを見ると，B項目では男性29%に対して女性は40%で，C項目では男性27%に対して女性14%であり，中国の女性は男性より非言語的行為においてやや遠慮ぎみであると言えよう。

図1の比較分析を通して，言語行為において，日本では話し手の性別による差が認められるのに，中国側には認められないことが伺われる。更に，日本女性の「謝」と「謙」の回答数値は両方とも男性のそれより高いため，一方が高ければ，もう一方が低くなると言った相補的な関係は見られず，日本女性の間では「謙遜の原則」の適用が「合意の原則」の適用に優先するような事実は認められない。つまり，日本女性の間では，謙遜行為だけが男性より著しく多くなるといったような判断は，この調査の結果を見る限りではできないのである。

4. 相手の社会的属性による分析

予備調査の結果によって，ある内容の話題はある社会的属性の相手とは結び付かない，又は結び付きにくいということが分かったので，今回の調査では，話し相手を，話題の内容に応じて，二系列に分けた。系列1は，「先生，上役，同僚，父，母」で，この系列の質問内容は，①「学校で良い成績を取ったとき，あるいは会社で優れた業績を上げたとき，回りの人に褒められた場合，それぞれどう反応しますか」，②「路上に倒れた老人があなたによって助けられたことを，周りの人に知られて，『優しい』とか『立派だ』とか，人柄や性格のことを褒められた場合，それぞれどう反応しますか」の二種類である。系列2の話し相手の属性は「初対面の男性，初対面の女性，知り合いの男性，知り合いの女性」で，それに対する質問内容は，③「それらの人に自分の容貌やスタイルのことを褒められた場合，それぞれどう反応しますか」，④「それらの人に自分の服装や身の回りのものを褒められた場合，それぞれどう反応しますか」の二種類である。反応の内容を示す回答欄の選択肢は二系列ともA「謝」，B「笑」，C「転」，D「謙」の四つである。

ここでは，話題内容による差を無視し，系列1の場合は質問①と②の回答結果を合計し，系列2の場合は質問③と④の結果を合計して分析する。そして，言語的行為の「感謝」と「謙遜」を中心に，相手の属性による回答の差を見ることにする。

4-1. 系列1の結果

まず，系列1の回答結果を見よう。図2に示すように，日本側の結果は「上役」から「母」へと「謝」の数値が段々上がって行くのに対して，「謙」の数値が段々下がって行く。感謝と謙遜の回答値は全く相補的にな

っている。同じ目上の人でも，身内の人に対しては，感謝行為の方が，謙遜行為より多いのに対し，上役，先生など身内以外の目上の人に対しては，謙遜行為が感謝行為より多いことが示されている。同僚は親疎関係から見ても，上役，先生と父母の間に属するものであろうと考えられるが，調査結果も予想どおりの中間的な数値を示している。

（ここで示した数値はA「感」，B「笑」，「C「転」，「謙」の四つの回答の中でのパーセンテージである。この図は言語的行為のAとDだけを抽出して作成したものである。

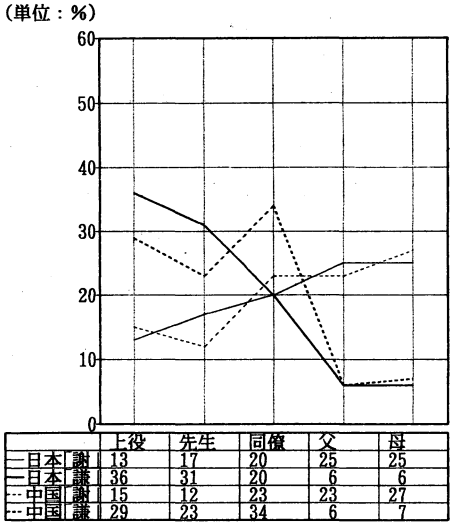


図2

中国側の結果を見ると，多少のゆれはあっても，大体において日本と類似の趨勢を示している。一つ注目すべき点は，相手が同僚である場合の数値が，日本側は感謝と謙遜両方とも同じ20%であるが，中国側は，謙遜の数値がとび抜けて高いということである。謙遜行為は自己への賞賛を最小限にすることによって相手への礼儀的な配慮を示す行為であるが，中国では，このような配慮は，目上の人よりも同じ立場にある，いわゆるライバル的な存在の人に対して多く払う傾向があるようである。

謙遜行為の出現率が一番少ない相手は父母であることについては両国とも同じ結果を示しているが，謙遜行為を一番多く取る相手は，日本側では，親疎関係と上下関係の二つの要因が効いて，身内以外の目上の人になって

いるのに対して，中国側では，仲間から目立たないように行動するといういわゆる「樹大招風」（出る杭は打たれる）の意識が効いているのか，話し手の同僚となっている。この結果によると，中国社会での「謙遜行為」の遂行は単純に相手との親疎関係や身分の上下関係だけによるものではないことが明らかである。

4－2．系列2の結果

系列2の相手は話し手と熟知度と性別によって設けた。性別に関しては，質問項目の中では，「男性」，「女性」と分けて調査したが，相手の性別による回答数値を分析した結果，そこにはっきりした差は認められなかった。けれども，話し手の性別と関連付けて，回答結果を「同性」と「異性」に組み替えて分析すると，次のような形の図形が現れた。

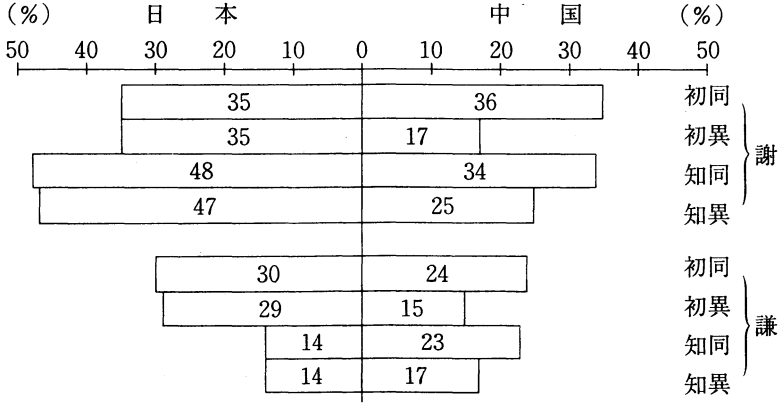


図3

（この図は図2と同じように四つの回答のうち言語行為だけを抽出して作成したものである。）

図3の日本側の結果を見ると，感謝行為と謙遜行為には，話し手自身との性的差（同性か異性か）による数値の変動は全然見られないが，話し手

との熟知度による数値の変動が明らかに現れた。感謝行為は初対面の人より知り合いに対して多く行われるのに，謙遜行為は知り合いより初対面の人に対して多く行われる。そして，感謝と謙遜の回答値は全く相補的な関係を示している。

中国側の結果は，日本側とは対照的に，話し手と相手の熟知度による差は認められないが，話し手と相手の性的異同による差がはっきりと浮かび出ている。熟知度よりも性的要因の方が反応の結果に響いていることが分かるのである。ここで一つ注目すべき現象は，中国側の被調査者には，感謝反応と謙遜反応の両方が同性に対して多く現われ，異性に対しては少なく現れているということである。この傾向は被調査者の男性と女性の両方ともに見られる。この，異性より同性に対して丁寧な反応をするという調査結果の背景に，どんな要因が働いているかはまだ不明なのだが，これは，中国の若者の間において，男女の接触が少なく，異性に対するコミュニケーションそのものが少ないことの現れではないかと考えられる。男女間の付き合いの少ない若者が，異性の人に容貌や服装などを褒められる場合，照れ臭くてどう答えていいか分からなく，ただ笑って済ますか話題をそらすかしかできないといったような状況が推測されるのである。

以上二系列の相手に対する反応の結果を見ると，日本側は，二系列ともに相手との親疎関係が回答数値の変動の主な要因であることが明らかである。そして親しい関係にある人に対して謙遜行為が少なく，疎い関係の相手に対して謙遜行為が多く現れることも，二系列ともに同様である。中国側では，系列1に現れたように家族に対しての「謙遜行為」が少ないという点においては，「親疎関係」の影響をある程度反映しているが，日本ほどはっきりはしていない。一方，相手との性的差による影響は系列2ではっきり出ている。永田高志氏は『若者の敬語に対する意見』(1988) という調査報告の中で，日本語の待遇表現は相手が「ウチかソトに属している

かによる区別が明確になっている」と指摘された。今回の丁寧な言語行為——「謙遜行為」に関する調査の結果は永田氏の敬語意識調査と同じ傾向を示している。しかし，一方，この調査では，謙遜の言語行為において，相手の性別による差が見られない。相手との親疎関係を重視し，性別の異同を無視する傾向は，「謙遜行為」という丁寧な言語行為の上にはっきりと反映されていることが今回の調査で明らかになった。

5. 話題内容の性質による分析

第4節で触れたように，調査の質問文は次の四つの話題内容に関するものである。

（1） 人を助けたときに自分の人柄や性格を褒められた場合。

（2） 自分の容貌やスタイルを褒められた場合。

（3） 学校で良い成績を取った（あるいは会社で優れた業績を上げた）時，人に褒められた場合。

（4） 自分の服装や身の回りの物を褒められた場合。

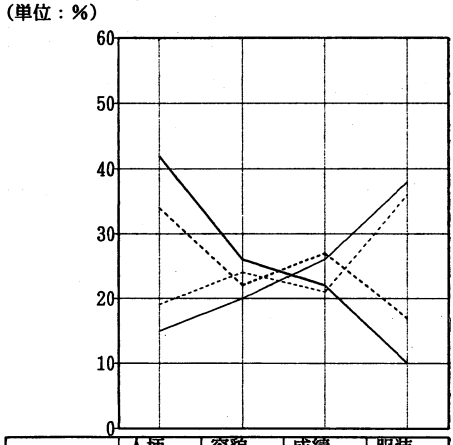
（以下「人柄」，「容貌」，「成績」，「服装」と略す。）

回答の選択欄は，先と同じ，A「謝」，B「笑」，C「転」，D「謙」の四つだが，ここでは，言語行為に焦点を当てて，この四つの場面に現れた感謝行為と謙遜行為の出現率を見ることにする。

この四つの話題内容の性質を考えると，「人柄」は，その人の性格，性質のいかんにかかわるもので，それに対する評価は直接その人の人間性への評価につながるものである。「容貌」はその人の外観のいかんに関するものである。この二つとも相手自身の（内在的，又は外形的な）特徴に対する直接的な評価である。「成績」はその人の能力のいかんに関するものだが，それに対するプラス評価は，あくまでも，成績，点数などを介しての間接的な評価になる。「服装」は，言ってみれば，その人の美的センス

の現れではあるが，「服装」に対する評価も，直接その美的センスに対するものではなく，「服装」というその人の所有物を介する間接的なものである。この四つの話題内容の性質上の違いを念頭において，図4の統計結果を見てみよう。

日本側の結果は，「謝」の数値が「人柄」から「服装」へとだんだん高くなって行くのに対して，「謙」の数値は「人柄」から「服装」へと次第に低くなって行く。これは，つまり，褒めるというプラスの評価を与えられるとき，その対象となるものが，話し手自身（賞賛を受ける人）との関係において，近ければ近いほど，又は話し手自身の属性と見られるものであればあるほど，「謙遜行為」が多く行われることを示していよう。逆に，そのプラス評価が自分の所有している物に対して発せられ，評価の対象が，自分との関係において遠ければ遠いほど，又は間接的になればなるほど「謙遜行為」が少なくなり，「感謝行為」が多くなる。勿論，褒める対象（話題内容）と褒め言葉を受ける人との関係が更に遠ければ，又は無関係になれば，その人は，自分が褒められることを予想しないし，「謙遜行為」や「感謝行為」を取る必要もなくなる。ここでも二つの行為の出現率は一方が高ければ，もう一方が低くなるといった相補的な関係を示している。



	人柄	容貌	成績	服装
―日本「謝」	15	20	26	38
―日本「謙」	42	26	22	10
---中国「謝」	19	24	21	36
---中国「謙」	34	22	27	17

図4

中国側では，容貌と成績の値が微妙な変動を見せているが，全体として日本と似た傾向を示している。つまり，褒める対象が相手自身との関係において近ければ近いほど「謙遜行為」が多く行われるということである。

6. 相手の心理的認識による分析

同じ話題で，同じ相手に対する場合，話し手の話題内容に対する認識，自己評価によって回答の結果が影響されるかどうかを見るために，調査項目に次のような質問を設けた。

「あなたは自分の容貌やスタイルに自信がありますか」。この項目の回答欄には，自信が「ある」，「少しある」，「分からない」，「余りない」，「ない」の五つの選択肢を設けた。日本と中国両方の回答結果は表1にまとめて示す。

表1　〈自信度〉

	1有(%)	2少有(%)	3分らぬ(%)	4余無(%)	5無(%)	6他(%)	合計
日本	6(6.1)	7(7.1)	38(38.7)	19(19.3)	27(28.5)	1(1.0)	98
中国	16(14.6)	53(48.6)	12(11.0)	18(16.5)	7(6.4)	3(2.7)	109

自分に対する評価，いわゆる自信度は，中国と日本との間で明らかに違った結果を示す。1（有）と2（少有）を合わせて，自信のある人は，日本側では2割未満に過ぎないが，中国側では半数以上に達している。4（余無）と5（無）を合わせて，自信のない人は日本では約半数になるが，中国側では2割ぐらいにしか達していない。そして3（分らぬ）という曖昧な答をした人は，日本で4割近くに達しているが，中国側では僅か1割である。

次に，自信度と，褒められる時の反応との関連を見るために，自信のある人とない人の，質問3「自分の容貌やスタイルのことを褒められた場合，どう反応しますか」に対する回答結果を分析する。ここでは1（有）と2

（少有）を合わせて「自信あり」のグループとし，4（余無）と5（無）を「自信無し」のグループとする。日本と中国それぞれについて各グループの反応の結果を見ると，図5の通りである。

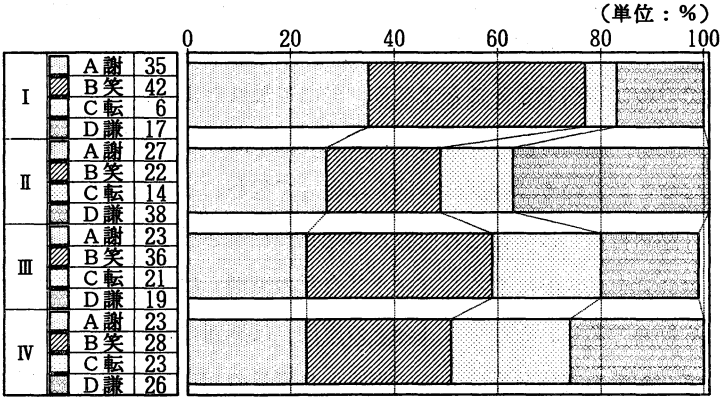


図5

日本の場合，図5での両端の言語行為に注目して，グループⅠ（自信あり）とグループⅡ（自信なし）を比べてみると，自信のある人には感謝行為が多く，謙遜行為が少ないが，自信のない人には感謝行為が少なく，謙遜行為が多い。感謝行為と謙遜行為は自信があるかないかによって互いに相補的な関係を示していることが分かる。中国では，感謝行為の場合は，グループⅢ（自信あり）とグループⅣ（自信なし）の間に自信度の差による変動が全然見られないが，謙遜行為の場合には日本より少し程度がゆるやかなものの，自信のない人ほど「謙遜行為」を多く取るという傾向を示している。

この項目の調査で，「謙遜の原則」の適用は話し相手の社会的属性や話題内容の性質といった要因に影響されるだけでなく，話し手自身の，褒められる対象となる事実に対する認識，評価のいかんにも影響されることが明らかになった。このように，謙遜行為の遂行には多様な要因が絡んでい

ることが分かった。

7. 「謙遜の原則」と「合意の原則」の相関関係

人から賞賛を受けたとき，礼儀に適うような行動をするために，丁寧な言語行為として，謙遜か感謝の言葉を述べるということは日常の言語生活の中で一般に観察できることである。先にも触れたように，人から賞賛を受けたときの謙遜行為は「自己への賞賛を最小限にし，自己への非難を最大限にする」という「謙遜の原則」に従って行われる行為であり，この場合の「感謝行為」は「自己と他者との意見の相違を最小限にし，自己と他者との合意を最大限にする」という「合意の原則」に従うことによって行われる行為である。ここでの「合意の原則」は感謝の言葉を述べることによって，相手の賞賛を受け入れ，相手との意見の相違を最小限に止めることによって適用されるのである。英語圏社会では，相手の賞賛を否認するような「謙遜行為」よりも，その賞賛を，感謝することによって「丁重に」受け入れることのほうが，慣例的により丁寧であるとされている（リーチ p. 199)。したがって英語圏社会では人から賞賛を受けた場合「合意の原理」を遵守するために「謙遜の原則」を犠牲にする傾向があると言えよう。ここでは，日本社会と中国社会において，「謙遜の原則」と「合意の原則」との間にどのような関係があり，またどのような場合に一方の原則がもう一方の原則の犠牲になるか，そして「謙遜行為」と「感謝行為」とではどちらがより丁寧であると意識されているかを，今回の調査結果しの分析を通して見ることにたい。

まず日本側について，第4節での相手の社会的属性による分析，第5節での話題内容の性質による分析，第6節での話し手の心理的認識による分析を通じて現れた「謙遜行為」の数値を分析すると，次のような特徴が抽出される。

① 相手の属性の場合は「上役」・「初対面の人」，話題の場合は「人柄」，認識の場合は「自信なし」のそれぞれの項目に「謙遜行為」が多く現れ，「感謝行為」が少ない。

② 逆に，「父」(「母」)・「知り合い」，「服装」，「自信あり」の項目には，「謙遜行為が少なく，「感謝行為」が多く現れる。

図2～5の統計結果に示されるように，いずれの場合も，感謝と謙遜の数値は相補的な関係になっている。つまり，①のような場合には、「謙遜の原則」への適用が優先し，「合意の原則」への適用はそれによって一部犠牲にされるが，②のような場合には，逆に「合意の原則」への適用が優先し，「謙遜の原則」が一部犠牲にされる事実が認められる。

次に，「謙遜の原則」と「合意の原則」とではどちらの方がより丁寧なコンテクストにおいて適用されるかを見るために，「謙遜行為」及び「感謝行為」が多く現れるそれぞれの項目の間にどんな共通性があるのかを見てみよう。

南不二男 (1987) によれば，日本語の敬語の使用条件には「ウチとソト」，「上下」，「親疎」などの関係が関与しているという。一般的な傾向としては，身内の人，目下の人，親しい人に対してよりも，身内以外の人，目上の人，疎い関係にある人に対して，敬語または丁寧な言葉が多く使われる。つまり後者のようなコンテクストは丁寧な言語表現を要求するコンテクストである。丁寧な言語表現と丁寧な言語行為はまったく同じ次元ではないが，丁寧度の高い言語表現を要求するコンテクストが逆に丁寧度の低い言語行為を要求するということは一般的には考えられない。この日本語の敬語表現の使用条件を，日本における丁寧な言語行為の遂行条件に適用してみると，身内以外の人，目上の人，疎い関係にある人に対して多く行われる謙遜行為は，身内の人，目下の人，親しい関係にある人に対して多く行われる感謝行為より，より丁寧で礼儀ある行為と一般的に認識されて

いると言うことができよう。

次に，他人又は他人の所有物が褒められる場合，我々はそれを聞いて，感謝したり，謙遜したりしない，あるいはしたとしても相手への礼儀的な振る舞いにはならないことからも分かるように，賞賛の対象が自分自身とより関係の深いものであればあるほど，丁寧な反応をすることが要求される。謙遜行為と感謝行為はいずれも丁寧な言語行為と見なされているが，日本人社会では，更にどちらのほうがより丁寧だとされているかを見る場合，以上の相手の属性のほかに，話題内容の性質からもそれを推定することができる。謙遜行為は感謝行為より，より話し手自身に関係の深い話題に対して多く行われていることから，謙遜行為は感謝行為より一段と丁寧度の高い言語行為であるとみなすことができよう。

更に，相手の賞賛の言葉に示される評価の程度は，それを受ける人の自己評価と一致する場合と，その自己評価より高い場合とがある。皮肉になるような特殊なコンテクストを除いて，人々は，後者の場合の方が前者の場合よりより好意的に受け取り，一層丁寧な反応を示すのが普通である。第6節の分析の結果 —— 自分の容貌やスタイルに自信のない人ほど謙遜行為を多く取り，自信のある人ほど感謝行為を多く取るといった事実から，謙遜行為は感謝行為と比べより好意的で丁寧であると推定することができよう。

以上の三つの点から，日本人社会では，より高い丁寧度の反応が要求されるコンテクストにおいて，自己の賞賛を最小限にするという「謙遜の原則」の適用が自己と他者との意見の相違を最小限にするという「合意の原則」に優先し，謙遜行為を感謝行為より高く評価する傾向があると見ることができる。

中国側の調査結果を見ると，謙遜行為と感謝行為の間には，図2と図4に現れるような，（話し相手がソトの人で，話題内容が直接自分自身に関するものである場合は謙遜行為が多く，逆に身内の人に対して，また自分

の所有物に関して言う場合は，感謝行為が多いというような）相補的な関係を示すものもあれば，一方で図3に現れるような（相手が同性の場合，謙遜行為も感謝行為も共に高くなるような）同等な関係を示すものもあり，更に図5のような，感謝行為は話し手の自己評価の差に影響されず，謙遜行為の数値変動に何ら関係も示さないものもある。従って，中国では，謙遜行為と感謝行為との間に，日本で見られるような一方の数値が高ければもう一方が低くなるという明瞭な形の相関関係を見いだすことができず，両行為の間の丁寧さの場合の推定が難しい。図2の「同僚」の項目に示されるように，中国では「謙遜行為」の遂行条件は日本と比べてより複雑で，丁寧さ以外の要因が関与していることが分かる。

8. 結　論

以上各節で分析したように，丁寧な言語行為のストラテジーの一つである「謙遜の原則」の適用は，日本と中国において，それぞれ多様な状況を呈している。それと「合意の原則」との関係も日中両国間に相違が出て来ている。両国間に現れた傾向をまとめると，次のとおりである。

共通点：

◇「謙遜の原則」の適用に話し手と話題との関係が関与する。話し手と関係の深い話題ほど謙遜行為が多く行われる。

◇「謙遜の原則」の適用に話題内容に対する話し手の自己評価の程度が関与する。相手の賞賛が話し手の自己評価より高いほど謙遜行為が多く行われる。

相違点：

日本	中国
◆「謙遜」、「合意」両原則への適用はともに女性が男性より積極的で	◆「謙遜」、「合意」両原則への適用には男女差が認められない。

ある。

◆「謙遜の原則」の適用に相手との親疎，上下関係の要因が関与する。疎い関係の人，目上の人に謙遜行為が多く行われる。

◆「謙遜」と「合意」の両原則の間にいずれも相補的な相関関係が存在している。

◆謙遜為行は感謝行為より，より丁寧なコンテクストで遂行される傾向がある。

◆「謙遜の原則」の適用に相手との親疎関係と性別の差が影響する。異性より同性に対して謙遜行為が多く行われる。

◆「謙遜」と「合意」の両原則の間には相補，同等，無縁など多様な関係が存在している。

◆謙遜行為と感謝行為の遂行条件は単に丁寧度という尺度だけによるものではない。

注

1) 「話題をそらす」行為は，発話を継続するという点では言語的行為というべきだが，ここでは，会話の流れと関連のある発話をするのではなく，一方的に一つの話題を中断させる（関係の無い別の話題に移す）行為と見て「非言語的行為」として扱う。

参考文献

1. 林知己夫　1973『比較日本人論――日本とハワイの調査から』中公新書
2. 藤堂明保　1974「中国語の敬語」(『世界の敬語』明治書院)
3. 井出祥子　1982「待遇表現と男女差の比較」(『日英語比較講座　第5巻　文化と社会』)
4. Geoffrey. N. Leech 1983『PRINCIPLES OF PRAGMATICS』池上嘉彦・河上誓作訳　1987『語用論』紀伊国屋書店
5. 大石初太郎　1983「性別・年齢別と敬語使用」(『現代敬語研究』筑摩書房)
6. 南不二男　1987『敬語』岩波書店
7. 永田高志　1988『若者の敬語に対する意見』(私家版)
8. 彭　国躍　1989「『謙遜の原則』の適用に関する比較社会語用論的試み」(『平成元年度日本語教育学会大会発表要旨』)

(大学院後期課程学生)